

流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和五年六月句会(第二三三回)

兼題 「麦酒(ビール)」

開催日 令和五年六月二十四日

開催場所 流山市生涯学習センター

出席者 六名

投句者・選句者 八名

(四点句)

●菖蒲園離れて気づく曇り空

寿歩

選評：菖蒲は水辺に咲いて丈が低い。眺める視線は下向きが続く。ひとしきり眺めて視線を戻すとあぁ、今日は曇りだったのだと。菖蒲や紫陽花の紫は快晴の空には似合わないような気もする。

(小牧記)

●びわの実やたわわ切ない無人の家

小牧

選評：祇園精舎の鐘の声に、平家物語の作者は無常の響きを感じた。この句の作者は、無人の家のたわわに実っている枇杷の生の営みに無常を感じ、切なくなつたのだろう。無人家の、時期が来ればたわわに実る果実の様がビジュアルとして浮かび、生きとし生けるものの哀れ迄感じ、様々な想いを巡らす契機となる句である。

枇杷の実と無人の家という取り合わせがキイとなるので、**びわの実やと切らずにびわの実の**とした方が良いのではとの声が二、三挙があった。

(徹心記)

(三点句)

●駐禁の厳しき札や額の花

則子

選評：公園か通り沿いのちよつとした所の紫陽花を楽しんで戻ってみたら、無情にもワイパーに駐禁のキップが挟まれていてがっかり、と想像しました。実際は、大きく駐禁と書いた札をフェンスに張っている家のアプローチに額の花が咲いていた、とのこと。まったく絵面は違つてしまいましたが、「額の花」と「駐禁」の取り合わせの意外さの魅力は変わりません。

(寿歩記)

●水静かボートの手摺夏の風

互酬

選評：四万十川でカヌーをしてきたところで情景が浮かびました。命あふれる川面を渡る穏やかで気持ちの良い風を感じています。中七の表現が今一つはつきりしないので、「手漕ぎボートに」としたいです。

(玄鳥記)

(二点句)

汽車旅の鞆に潜む麦酒かな
友は下戸ビール祭の旗横目
恋多き先輩愛すビールかな
初対面ビール交わしつ垣根取る
梅雨激し更に濃さ増す葉の緑
取り敢えずと言いつつずっとビール哉
早すぎる台風ひなの声途絶え
初鯉なみなみ一杯土佐の宿

玄鳥
寿歩
則子
徹心
小牧
徹心
玄鳥

(一点句)

防犯パト済ませひとまずビールかな
木下闇バイトの中身問わずして

夢心
互酬

(投句)

ビール腹ポンと叩いてもう一杯
応援やグビツと開ける缶ビール
地ビールや三方(さんぼう)に載せ
祈(ね)ぎ事(ごと)を
戸惑えり多様化したるビールには
休刊と言いつつ矜持や楨花
野にありて歩み止めたり姫女苑
カナリアの小夏をくれし土佐の人
横須賀の軍港巡り風薫る
ベランダに初夏の挨拶ゴキブリよ
念艦三笠艦橋大南風

小牧
小牧
互酬
徹心
小牧
則子
玄鳥
夢心
夢心
夢心

『句会後記』

投句全二四句で、四点句二、三点句二、二点句八、一点句二句と評価が分かれました。メンバーの共感した句が様々だった証であり、選評やアドバイスは勿論、句に関連した知識や思い出などがたっぷり話し合い、二時間では足りないくらいでした。また、ゼロ点句の良い点や選ばなかったマイナス理由も意見交換でき、十一年の積み重ねを感じました。会費やコロナで中断していた暑氣払い開催などを検討し、二名欠席の六名の句会が無事終了しました。

(寿歩記)